カワラナデシコが咲く伝統地

植物のサイクル保たれ

開田の草地

梅雨が明けた7月の後半、神戸大学生物多様性研究室が調査する木曽町開田高原の伝統的草地に色とりどりに花が咲く。梅雨の時期から咲く白いオカトラノオ、赤紫のノアザミやウツボグサの花に続き、薄紫のギボウシ、黄色のユウスゲ、ピンクのカワラナデシコの花が咲きだす。

高く丈を伸ばして咲く花には、ミヤマカラスアゲハやクジャクチョウなどの大きなチョウが回遊している。草地の中ほどや地面近くにも多種の花が咲き、コキマダラセセリやヒメシジミなどの小さなチョウが草の中を飛び交う。各種の草が生い茂り足の踏み場もないほどだ。

一方、草刈りのみの管理地は草がまばらだ。明るく地面まで光が届くが草のない裸地も多く歩みやすい。

冬の飼い葉のための伝統地の草刈りは隔年で時期は初秋。だが採草を目的としない草刈りは、草の勢いをそぐために、毎年、盛夏を迎えるこの時期に刈られることが多い。火入れはなく刈り草は持ち出され、土壌は痩せ気味だ。草の種類も伝統地に比べ少なく、この時期咲き始めるカワラナデシコは見当たらない。

「花が咲き、種を結ぶ。次世代を残す植物のサイクルだ。草刈りの時期にこのサイクルを終えているものは草地に残るが、そうでない種類、特に秋咲きの草は抜け落ちていくのでは」と同大学院生の永田優子さん(25)はみている。

開田の豊かな自然に引かれ、23年前に関西から移住した田中芳江さん。引っ越した当時きれいにと草を刈り、地域の住民から「草を伸ばしているんだ」と教えられた。「雑草ではなく馬の食べ物」と感心したという。花が好き、という田中さんは、10年前から移住以来減っていく山野草の保全活動を有志で始めた。近年は西野地区の水芭蕉(みずばしょう)園で植生を調べている。「山野草の花はここでは『なんでもない身近な花』。でもそれが開田の魅力」と話す。

(田澤佳子)

伝統地に咲き始めたカワラナデシコ。秋の七草で日本の草地の普通種だが、自生地は減り、絶滅危惧種に指定された地域もある